

第19回 MASセミナー 港

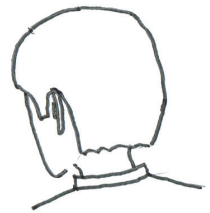
「街と建築を海外と日本から考える」

日時:2015/6/27(土)
講演:14:00~16:00



『あんなに空気の美味しい、山あり自然ありの故郷からどうしてここに移り住んで来たのですか?』『……東京は良いです。なんたって便利だし隣近所の目を気にせず干渉されず、大概の事をしても誰にもとがめられずに暮らせますからねえ。』
『100年も続いた歴史的価値ある街や建物の隣になぜいきなり40階建ての高層ビルが建っちゃうのでしょうか?』『家賃が沢山取れて儲かるからです。経済第一主義の現代では当たり前でしょ。』
『あなたの家はどうして壁の色をあんな派手なピンクにしたのですか?』『子供の頃から家を建てる時はピンクにしたいと思っていました。妻もそうです。第一、ピンクは駄目!なんて法律にはないですから……』

鈴木 理己



日本では中世以来、建築や芸術は遥かに海をこえて影響されてきたことは確かでしょう。特に近代以降は急激に日本の様式はおろか精神性までもさまざまに変化してきた感はぬぐえません。しかし、それでも日本人には引き継がれている大切なものが根っこにあることもたしかでしょう。そのなかで建築の集積である町並みは今の状況ではじっくり馴染んでいるとは思えません。どうも重要なポイントは日常性に潜んでいる様です。多くの個人が本当の意味で独立していれば、パブリックは充実したものとなると思うのです。それにはどうしたらいいのか考えたいと思います。



今井 均

建築を学び始めてから、毎年海外に行くことを楽しみにしてきました。ヨーロッパ、アメリカ、アジアなど、旅をする楽しさは、その町の暮らしを感じる街路空間のそぞろ歩きです。広場や路地、建物のファサードや庭のあり方など、街路と家との間にあるつなぎの部分に、町の文化や人の暮らし方を感じ取るのが楽しみです。よそ者が歩いて楽しい町というのが、豊かさではないかと思います。

一方、新規に開発された日本の郊外住宅地には何か違和感を感じるのはなぜでしょう。公私の中間的な領域のあり方について、比較して考えてみようと思います。



田口 知子



街でも建築でも、「見た目」を選ぶか「居心地」を選ぶか。京都を外から見ると「和の空間」に魅力を感じるが、京都に住む地元の人は、窮屈さを感じる人もいる。海外でも日本でも「街の美」は景観であり、「街の良さ」は暮らしやすさと思っていた。ところが最近の日本では「いい街」とは「便利な街」であり、駅前マンションの人气が高く開発を誘発する。建築家がつくる郊外型一戸建は都会人は好まない。殻にこもった都市型住居では景観はつぐれない。もはや「見た目」か「居心地」ではなく「利便性」なのか。海外ではどうなのだろう。



宮田多津夫

「カンパニリズム」って、ご存知ですか? イタリア語ですが複雑な意味を持っています。「土着愛」のようなことですが、もともと「カンパニール」が「鐘楼」という意味で、ここから教会の鐘が鳴り届く範囲を自他ともに許し合う地域と考えて、そこから出てきた言葉です。英語の「カンパニー(会社)」の語源もここあるようで、そこから当初は現在の株式会社概念とは大きく違い、地域の人々が協力し合って作る地域の生産組織を意味していたと取れます。
金融経済の発展により、人間が本来地域に密着して安心して楽しく生き、地域を美しくしようとした意識が失われました。しかしイタリアで生活していると、人々の暖かさの中に昔ながらのカンパニリズムが息づいているようです。というより、必死でカンパニリズムに生きようとしているように取れました。



大倉富美雄

多様な世界から見た日本の街の魅力
建築家という生き方を選んで以来、あらゆる場所の文化に浸って「まち」や人々の暮らしを考えるのが好きになり、時間の隙間をみつければ海外を放浪してきました。きちんとした留学経験はありませんが、今回のセミナーに際して、改めて渡航回数を数えたら90回を超えていて、我ながらびっくりしました。ヨーロッパだけでなくイスラム圏やインド文化圏も好きで頻繁に行っております。様々な文化の根底に触れてきたことを通して、日本の街の魅力を考えたいと思います。



村上晶子



英国に学生・教師として5年間住んだことがあります。その中で、一般の方との会話に街や建築が普通に登場し、環境に対する意識の違いを感じました。つまり街や建築に対して住民が興味を持っており、美しい街の価値判断が自然に醸成されているような気がしました。従って、建築家にとっては、その価値判断に耐えうるデザインでなければならないという厳しさもあるわけです。この意味をご一緒に考えることができればと思っています。



連健夫